

ネオホームレスの交流の実態と支援ネットワークのあり方

—新宿歌舞伎町を対象として—

The reality of Neo-homeless relationship and the proposal of their support network

-A case study in Shinjuku Kabukicho area-

鈴木 万由 *・矢口 哲也 **

Mayu SUZUKI*, Tetsuya YAGUCHI**

In recent years, young people, referred to as 'neo-homeless', are gathering and socialising in Kabukicho and other parts of Japan. Meanwhile, they are detained and squares are closed for mainly security purposes, based on fragmented perspectives. The purpose of this study is to clarify the comprehensive living circumstances of neo-homeless and their support systems in urban society, through questionnaire surveys and participant observations in Kabukicho area. The results of the study show that the neo-homeless are categorised into four types and have developed four types of dependency relationships with their surroundings. It was also found that they are actively involved in the support system and trying to become self-reliant.

Keywords: Neo-homeless, Kabukicho, Youth runaway, Toyoko kids, Support network, Self-reliance support

ネオホームレス、歌舞伎町、家出する若者、トー横キッズ、支援ネットワーク、自立支援

第1章 はじめに

1-1 研究背景

近年、歌舞伎町には「ネオホームレス」と呼ばれる若者が集まっている。彼らは SNS を通じてコミュニティを形成し、シネシティ広場や大久保公園などを居場所としている^{1) 2)}。ネオホームレスとは、青柳の『Z 世代のネオホームレス』³⁾で、「物理的な家はあるものの、家庭に居場所を見出せず、まちに集まる若者」として使われている。本研究では、「社会から疎外感を抱え、断片的な背景により社会から規制を受ける中で、まちに集まる若者」として定義する。ネオホームレスにとって、同じ思いを抱える仲間と関係を築き生活の拠り所する都市空間は必要不可欠であり⁴⁾、彼らの居場所は全国に広がる一方、治安の悪化や犯罪被害の増加を受け、各地で政策が実施されている⁵⁾。これらの対策は、援助交際や夜間の滞留行為など一部に焦点が当てられる傾向が強く、問題の本質的な解決に至らない。そうした状況下で、歌舞伎町ではネオホームレスへの物理的な居場所の提供が始まっており、今後は、ネオホームレスの実態を多角的に捉え、都市の仕組みや支援体制の改善が不可欠である。

1-2 研究目的

本研究では、トー横キッズをはじめとした多くのネオホームレスが集まる歌舞伎町を対象に、彼らの生活実態を明らかにする事、そして日常生活や周囲との関係性を把握することで、歌舞伎町におけるネオホームレスの現状や彼らの求める居場所像を明確にする事を目的とする。なお本論文では、居場所を「日常的に使う空間と彼らを支える人間関係が相互に作用し、ネオホームレスを包括的に支える状態」と定義し、居場所像を「ネオホームレスが理想とする居場所の在り方」と定義する。また実態に即したより効

果的な支援システムを提言し、全国に広がるネオホームレスのための居場所形成に資する知見を得ることを目指す。

1-3 研究の流れ

2 章では、歌舞伎町を調査対象地とし、ネオホームレスの現状、政策を整理する。3 章では、ネオホームレスの日常生活に焦点をあてスケジュール調査を通じて生活実態を把握・類型化する。4 章では、「日本駆け込み寺」でのアンケートと参与観察を通じ、ネオホームレス間および周囲の人々との相互作用を分析する。5 章では、支援者へのヒアリングにより、支援者側の認識や対応を明らかにする。6 章では調査結果を総括し、問題点を指摘した上で、支援体制に対する提言を示す。

1-4 研究の位置付け

1) 規制に関する研究

若者の規制に関する研究は多様な手法を用いて蓄積されている。飯島⁶⁾は、若年層のホームレスに着目し、規制の現状とホームレスに至るプロセスを聞き取り調査によって明らかにした。田中⁷⁾は、3名の若者に対してフィールドワークを実施し、若者の下位文化を社会的排除の観点から明らかにした。一方、従来の研究は非参与型の手法に偏り、若者と社会の関係を十分に捉えてきていない。若者の持つ背景は複雑多様で表面化しにくく、若者の実態を深く掘り下げ、彼らの経験や視点を包括的に把握する必要がある。

2) 社会参加に関する研究

若者の社会参加に関する研究は、多角的な視点からの蓄積がある。佐久間⁸⁾は、移行期にある若者を支援するユースワーカーの重要性について明らかにした。小田山⁹⁾は居場所空間に着目し、若者が支援施設をどのように捉えているかを明らかにした。しかしこれらは支援施設内での行動に焦点を当て、施設外での若者の実態を

* 学生会員 早稲田大学理工学術院創造理工学研究科 (School of Creative Science and Engineering, Waseda University)

** 正会員 早稲田大学理工学術院創造理工学研究科 (School of Creative Science and Engineering, Waseda University)

十分に捉えていない。社会参加を支えるには、施設外の行動やニーズも考慮した包括的な支援が必要である。

よって本論文は、以下の3点において新規性を有する。

- I 歌舞伎町に集まるネオホームレスに着目している
- II 参与型・非参与型・空間調査を行い、複雑多様な若者の実態と都市社会との関係を多角的に捉えている
- III 若者の支援施設内外での行動を調査し、若者の多様な側面に応えた支援について提言している

第2章 研究対象地の概要

2-1 歌舞伎町の空間的特性

歌舞伎町区域内の建築物を用途別に分類し、図1に示す。建物が密集し、広場などの屋外空間が極端に少ない。歌舞伎町1丁目には飲食店と女性従業員の風俗店、2丁目には男性従業員の風俗店と宿泊施設が混在する。新宿駅周辺には飲食店が多く、その他の街路に面する外周は住居やオ

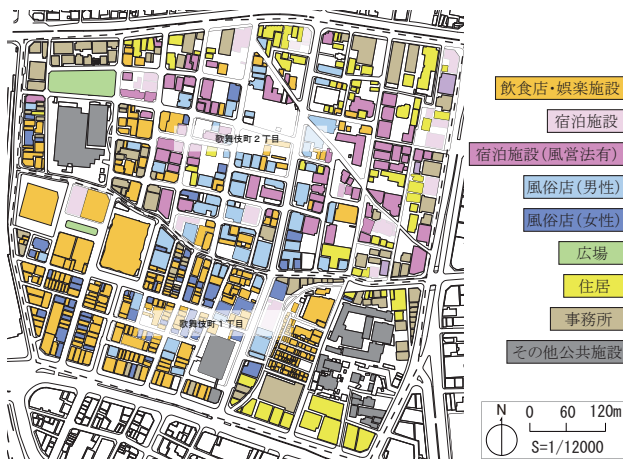


図1 歌舞伎町の各建築物の用途

フィスが立ち並び、自由に出入りできる建物は少ない。

2-2 ネオホームレスに対する取り組み

歌舞伎町のネオホームレスを支援する団体を表1に示す。本論文では、歌舞伎町に拠点を置き包括的な支援を行っている、「日本駆け込み寺」を訪れるネオホームレスを対象として調査を行う。概要を表2⁽¹⁾に示す^{(10) (11) (12) (13)}。

表1 施設概要

	団体名	支援対象
民間	ばっぶず	女性のみ
	日本駆け込み寺	青少年
	Colabo	女性のみ
行政	きみまも	青少年

表2 日本駆け込み寺概要

場所	東京都新宿区歌舞伎町2-42-3
開設日	2002/05/20
運営主体	民間 現地担当員(常勤3名+非常勤3名) ボランティア(数名/1イベント)
運営内容	・みらいカフェ(毎週土曜日) ・ゴミ拾い見回り:2~4回/日 ・アウトリーチ:木金土曜日

第3章 ネオホームレスの日常生活の類型化

本章では、施設を利用するネオホームレスの生活スタイルを明らかにするため、彼らの24時間の行動パターンに着目した調査を実施する。断片的な生活に留まらず終日の動きを追跡することで、時間帯ごとの生活リズムや空間利用の実態を明らかにし、ネオホームレスの暮らしを鮮明に浮かび上がらせることを目的とする。

3-1 調査Ⅰ：歌舞伎町でのネオホームレスの空間利用

3-1-1 調査概要

調査Ⅰでは、駆け込み寺を利用するネオホームレスを対象として、マッピング調査を実施した。調査の概要を表3に示す。

表3 調査Ⅰ概要

調査対象	駆け込み寺を利用するネオホームレス
調査場所	駆け込み寺内
調査日程	2024/09/14~2024/10/5
有効回答数	48
調査方法	白地図を用いたマッピング調査
回答手順	歌舞伎町内のよく利用する場所を、施設内に掲示された大きな白地図に、丸いシールで貼って示す。(複数回答可)

3-1-2 ネオホームレスの利用する場所と行為

マッピング調査の結果を図2に示す。支援施設を利用しているネオホームレスの居場所は歌舞伎町の西側に偏り、中でも中央部は利用者が少ない地点が点在していた。広場等の屋外空間に加え、支援施設・風俗店・公共施設などの室内空間も居場所として機能し、歌舞伎町の屋外と屋内両方を利用していた。

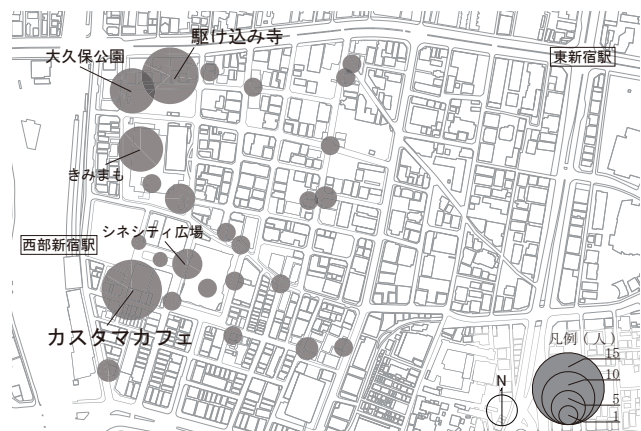


図2 若者の利用する場所

3-2 調査Ⅱ：ネオホームレスの生活スタイル

3-2-1 調査概要

調査Ⅱでは、駆け込み寺を利用するネオホームレスを対象として、記入式のスケジュール調査を実施した。調査の概要を表4に示す。

表4 調査Ⅱ概要

調査対象	駆け込み寺を利用するネオホームレス
調査場所	駆け込み寺内
調査日程	2024/09/14~2024/10/05
有効回答数	24(表3の回答者のうち、追加調査への同意が得られた者)
調査方法	記入式のスケジュール調査
回答手順	1時間ごとに区切られた白紙のスケジュール表に、平日と休日それぞれの一日の行動を記入し、各行為(睡眠、食事など)や場所を具体的に記載する。

3-2-2 時間ごとのネオホームレスの空間利用

空間利用を図3⁽²⁾に示す。歌舞伎町からネオホームレスが完全にいなくなる時間帯はなく、一日を通して屋内外を使い分けていた。

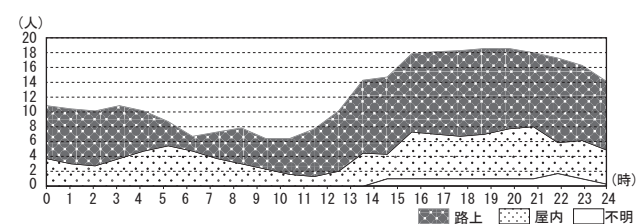


図3 週間平均に基づく時間帯別の空間利用

3-2-3 時間ごとのネオホームレスの行為

行為を図4⁽²⁾に示す。話す・消費するといった社会的行為に加え、寝る・食べる・稼ぐといった生理的行為も行われていた。

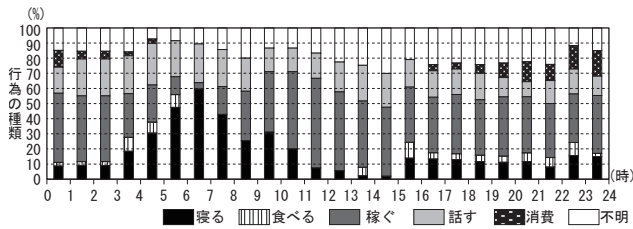


図4 週間平均に基づく時間帯別の行為

3-2-4 生活行為から見たネオホームレスの分類

各個人の行為の割合を図5⁽²⁾に示す。施設を利用するネオホームレスの行動パターンは4タイプに分類された。
タイプA「終日稼働型」：終日歌舞伎町におり、「稼ぐ」「寝る」のサイクルを歌舞伎町の中で行っている者
タイプB「終日社交型」：終日歌舞伎町におり、「話す」「寝る」のサイクルを歌舞伎町の中で行っている者
タイプC「目的一時滞在型」：自宅に生活の場を持ち、目的を持って一時的に歌舞伎町を訪れる者
タイプD「非目的一時滞在型」：自宅に生活の場を持ち、目的なく一時的に歌舞伎町を訪れる者
タイプA, Bは「おしゃべり」から「出勤」「寝る」といった行為まで終日歌舞伎町で行う一方で、タイプC, Dは歌舞伎町の外にいる時間も確認され、タイプAからタイプDに向かうにつれ歌舞伎町への依存度が増加する傾向が見られた。

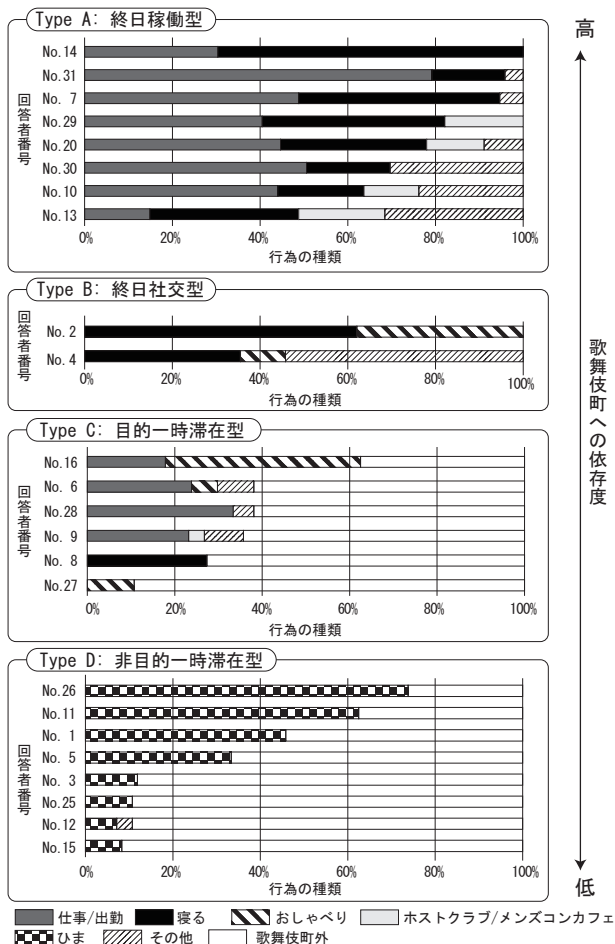


図5 週間平均に基づく個人の行為傾向と依存度による分類

3-2-5 分類別にみたネオホームレスの利用空間

タイプ別にみた歌舞伎町の各空間での滞在時間の割合を図6⁽²⁾に示す。本調査は駆け込み寺内で実施している為、駆け込み寺外の滞在時間のみを集計した。タイプAは、大久保公園とホテルを往来しながら生活し、一部の者はホストクラブやメンズコンカフェも利用していた。タイプBは広場を主な生活拠点とし、時折他の支援施設も利用しながら生活を営んでいた。タイプCは多様な活動を行いつつ、大久保公園や他支援施設をはじめとした、広範な空間を生活の基盤としていた。タイプDはほとんどの時間をシネシティ広場周辺で過ごし、他の場所への移動が少ない点で特徴的であった。施設を訪れるネオホームレスには、各タイプごとに利用する施設に特徴が見られ、多様な空間がネオホームレスにとって重要な生活拠点として機能していた。

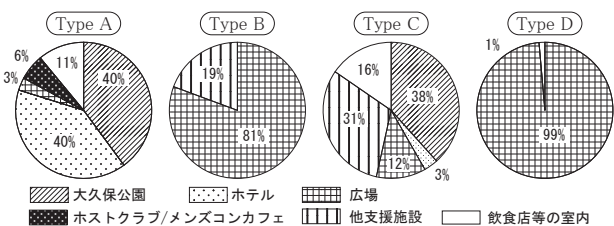


図6 タイプ別に見た歌舞伎町内の利用場所の割合

3-3 考察

結果から以下のことが考察される。

i) 多様な生活リズムの交錯

図5のように支援施設を利用しているネオホームレスには、多様な生活パターンが存在していることが明らかとなった。また図6のように、施設外では各自の目的に応じた空間を使い分けており、利用空間が重複しないタイプ同士も存在した。このことから、支援施設が異なる活動範囲を持つネオホームレスの間で、新たな関係性を形成する契機として機能していると考えられる。

ii) 様々な時間帯に様々な場所を利用するネオホームレス

図2より、ネオホームレスは広場や公園以外にも、歌舞伎町内の様々な公共施設を利用していた。これは歌舞伎町がネオホームレスの多様なニーズに対応する空間を提供していることを示唆しており、ネオホームレスの居場所形成には、彼らを取り巻く多様な周囲の人々の影響が関わっていると考えられる。

3-4 小括

本章では、マッピング調査・スケジュール調査により、ネオホームレスの生活リズムや空間利用の実態について以下の2点が明らかとなった。

I 多様な生活スタイルの相互交流：4タイプのネオホームレスは、施設外では異なる行動時間や利用施設を持ち、支援施設等の共通の場所を利用することで、自身とは異なる環境下にいるネオホームレスとも交流している。

II 公共施設の積極的な利用：ネオホームレスは、歌舞伎町の広場や公園に加え、飲食店やネットカフェ、風俗店、ホテルなど様々な公共施設を利用しており、周囲の人々や環境が居場所形成に強く影響している。

よって次章では、ネオホームレスを取り巻く人的つながりの実態を調査し、より詳細に明らかにする。

第 4 章 ネオホームレス取り巻く関係性

本章では、アンケート調査と参与観察を通じて、支援施設を利用するネオホームレスの歌舞伎町でのコミュニティと、居場所形成における関係性の重要性を明らかにすることを目的とする。

4-1 調査Ⅲ：アンケートから見る周囲との関係性

4-1-1 調査概要

表 5 調査Ⅲ概要

調査対象	駆け込み寺を利用するネオホームレス
調査場所	駆け込み寺内
調査日程	2024/09/14～2024/10/05
有効回答数	24（表4の回答者と同じ）
調査方法	紙面アンケート
調査項目	基本情報、歌舞伎町での活動、自傷行為の有無、周囲の人のつながり、求める空間像

調査Ⅲでは、駆け込み寺を利用するネオホームレスを対象に、アンケート調査を実施した。表5に概要を示す。

4-1-2 ネオホームレスが歌舞伎町に来るきっかけ

ネオホームレスが歌舞伎町と関わりを持つきっかけを図7に示す。彼らの多くは初来訪時は1人で歌舞伎町を訪れていた。初めて歌舞伎町を訪れるきっかけは、「お金が必要」「ファッションが好き」といった明確な理由を持つ者もいれば、「なんとなく」「家にいたくなかった」など、特に目的を持たずに訪れる者もいた。歌舞伎町は、「誰かと話す」といった交流を含む多様な目的で訪れる場となっていた。

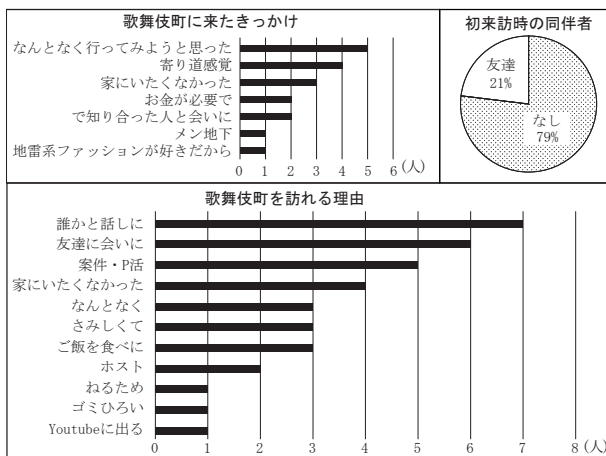


図 7 歌舞伎町と関わりを持つきっかけ (n=24)

4-1-3 ネオホームレスの歌舞伎町での活動

まず、ネオホームレスの歌舞伎町での資金調達について図8に示す。「歌舞伎町でアルバイト」をしているネオホームレスが最も多く、「案件やP活」「SNSで資金を集める」「家族が出してくれる」など、周囲の援助を受けている事例や、「国からの支援金」を利用しているケースも見られた。次に、歌舞伎町におけるネオホームレスの活動を図9に示す。ネオホームレスの活動は多様であり、目的の有無にかかわらず歌舞伎町で多様な活動を行っていた。

施設を利用するネオホームレスの自傷行為の有無を図10に示す。オーバードーズに関しては、「あり」が半分強を占め、リストカットも約30%と相当数のものが行っていた。また、どちらにも「無回答」が一定数存在した。

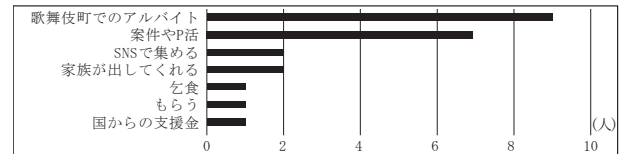


図 8 歌舞伎町における資金源 (n=24)

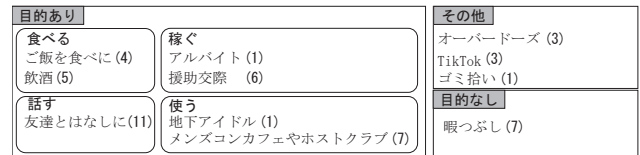


図 9 ネオホームレスの活動 (n=24)

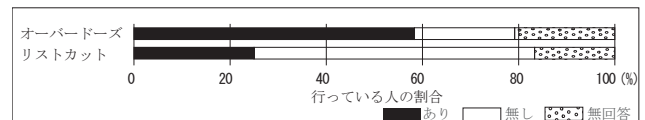


図 10 自傷行為の有無 (n=24)

4-1-4 ネオホームレスを取り巻く周囲の人々

ネオホームレスと周囲との信頼関係を図11に示す。支援施設スタッフは重要な信頼先であり、ホストクラブの担当スタッフ、警察等の歌舞伎町内の人とも関係を築いていた。一方、もっと頼りたいと感じながらも、十分な信頼関係を築けていない現状も見受けられた。

家族とのつながりを図12に示す。家族と完全に断絶している者は少なく、歌舞伎町訪問を肯定的に受け止める親が多かった。一方で、訪問を否定する親、親に知らせていない事例、親がいないケースもあった。

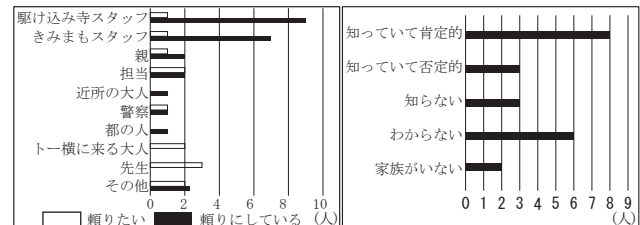


図 11 ネオホームレスの信頼対象 (n=24)

図 12 家族の認知状況 (n=24)

4-1-5 ネオホームレスが描く歌舞伎町の居場所像

ネオホームレスが描く居場所像を図13に示す。彼らの求める居場所像は「空間的側面」と「社会的側面」に分けられ、リラックスできる空間や他者との交流や協力関係を求めている。また、自分を理解してもらえる環境も望んでいた。

4-2 調査Ⅳ：参与観察から見る周囲との関係性

4-2-1 調査概要

調査Ⅳでは、6月初旬からボランティアスタッフとして参与観察を実施した。初めの3カ月間で信頼関係を構築し、その後約1カ月間に観察を行い、利用者の自然な会話や筆者との雑談の回答も含めてデータを収集した。概要を表6に示す。尚、本分析では、話者が交代するまでの

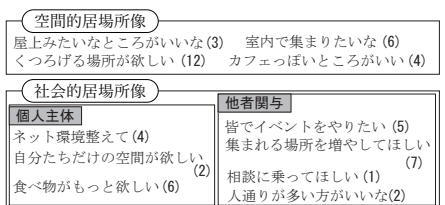


図 13 ネオホームレスの求める居場所像 (n=24)

一連の言葉を一つの「発話」と定義した。ただし、同一話者による発言であっても、間に休止が介在する場合は、それぞれを別個の発話として扱った。

表 6 調査Ⅳ概要

調査対象	駆け込み寺を利用するネオホームレス
調査場所	駆け込み寺内
調査日程	2024/06/15～2024/10/05 (観察日は毎週土曜日)
調査方法	参与観察による発話記録(発話はアンケートで得た氏名と共に目付順に記録)

4-2-2 ネオホームレスによる発話の内容

ネオホームレスによる発話の内容を図 14 の手順に従って分析し、その結果を図 15 に示す。彼らは、互いに「心理的」「経済的」「社会的」「身体的」依存関係を築いていた。心理的依存では、ネオホームレスが支援スタッフや友人に対して精神的な支援を求め、情緒的な安心感が重要視されていた。社会的依存では、「仲間を作る」や「イベントへの参加」といった社会的交流が求められていた。身体的依存では、「睡眠場所の確保」など、基本的な生存ニーズへの依存が見られた。経済的依存に関しては、「金銭的支援」や「乞食」といった経済的サポートが重視され、生活維持に不可欠な手段が見られた。

ネオホームレスによる全 792 発話の中から、彼らの居場所構築に関連すると 57 発話を分析対象として抽出、各発話を a から be までラベリング
抽出した 57 発話に対し、それらが居場所の構築においてどのような意味や機能を持つかをコード化し、さらに各発話の対話者(ネオホームレス、支援スタッフ、外部の人物)によって分類
上記のコード間の関連性を精査し、より上位の概念へと統合することで主要なカテゴリーを導出

図 14 ネオホームレスによる発話の分析手順

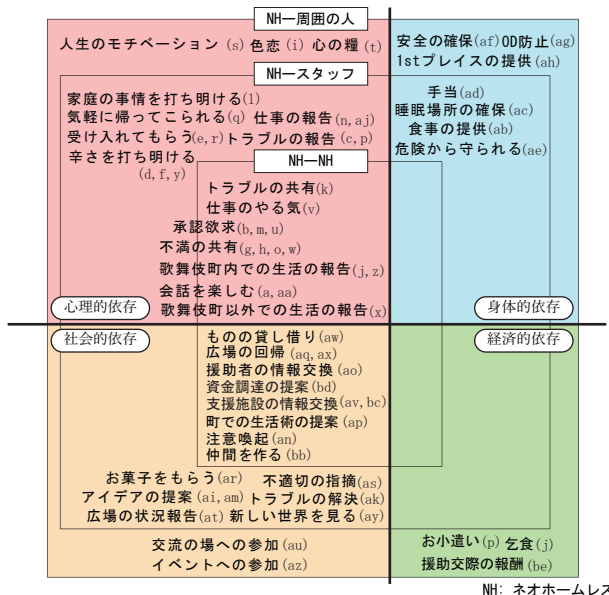


図 15 ネオホームレスと周囲の依存性

4-2-3 施設を利用するネオホームレス同士の関係性

ネオホームレス同士の関係性に関連する発話の内容を図 16 の手順に従って分析し、その結果を図 17 に示す。ネオホームレス同士の関係性は、異なる属性の者同士でも築かれていることが確認され、心理的・社会的な依存を基盤としていた。特にタイプ B が大久保公園で行う稼ぎ方と、タイプ C がシネシティ広場で行う稼ぎ方には相場や行為に違いがあり、知識やノウハウを施設での交流を通じて共有することで、より効率的に稼ぐ手段を学び合う様子が窺えた。またタイプ D は他属性のネオホームレスと交流し、その日の歌舞伎町での生活や行動を決定する傾向が見られた。異

なる属性のネオホームレス間での情報交換や支援は、彼らの歌舞伎町での生活の仕方を決定していた。

先行分析で得た 57 発話のうち、ネオホームレス同士のコミュニケーションとして抽出された 21 発話のそれぞれについて、発話者と対話者を 3 章の類型に基づき分類 (例: 「Type A から Type B への発話」)

先行分析 (図 14) で各発話に付与したコード (=関係性の内容) を、上記で類型化したタイプ間のコミュニケーションにマッピングした。その上で、各タイプをノード、コードをラベル、コミュニケーションの方向を矢印として図上に配置し、関係性モデルを構築

図 16 ネオホームレス同士の関係性に関連する発話の分析手順

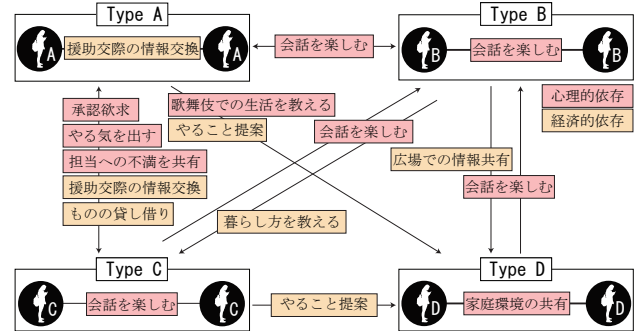


図 17 ネオホームレス同士の関係性

4-2-4 ネオホームレスと周囲との関係性

ネオホームレスと周囲との関係性に関わる発話の内容を図 18 の手順に従って分析し、その結果を図 19 に示す。

先行分析で抽出した「若者一スタッフ」による 30 発話、「若者一外部」による 6 発話を分析対象とし、参加者の類型化。具体的には、ネオホームレスは 3 章で定義したタイプ (A, B, C, D) に、対話者は「駆け込み寺 STAFF」「援助者」「親」といった具体的な属性に基づき分類

先行分析 (図 14) で各発話に付与したコード (=関係性の内容) を、上記で類型化した参加者間の関係性として整理した。次に、これらのコード群を意味内容の類似性に基づき比較・集約する操作を行い、「心理的依存」「身体的依存」「経済的依存」「社会的依存」の 4 つの上位カテゴリーを生成

上記のカテゴリーの中で、各タイプをノード、コードをラベル、コミュニケーションの方向を矢印として図上に配置し、関係性モデルを構築

図 18 周囲との関係性に関連する発話の分析手順

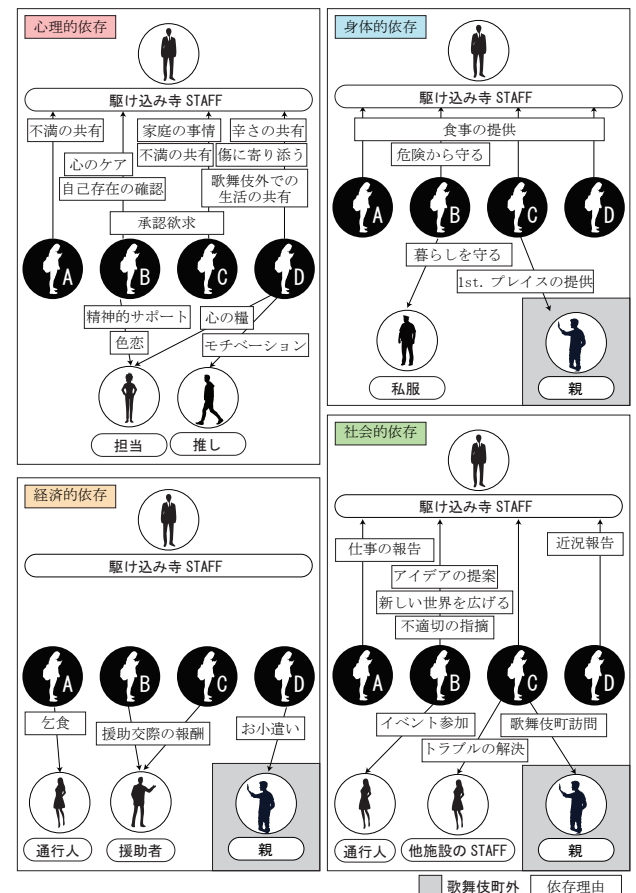


図 19 ネオホームレスと周囲の関係性

ネオホームレスの依存対象はタイプごとに異なり、歌舞伎町内外との関係においても差異が確認された。彼らは支援施設のスタッフに対して主に心理的・社会的・身体的依存を示しており、金銭的依存は見られなかった。タイプADは、金銭的依存を除き主に駆け込み寺のスタッフに依存していた。タイプDは外部に生活の場を持つため歌舞伎町への身体的依存が低い一方、タイプAはつながりの多くを支援施設に依存し、外部との接点が高タイプと比べて限られていた。また、タイプBは歌舞伎町外部への依存関係が見られなかったのに対し、タイプCは歌舞伎町内外にも依存を広げていた。

4-3 考察

結果から以下のことが考察される。

i) ネオホームレスを取り巻く依存関係

ネオホームレスは、心理的・経済的・社会的・身体的依存関係を通じて社会とのつながりを維持しているが、依存が深まることで自立の機会が阻害され、主体的な関わりを妨げるリスクが存在すると考えられる。また、生活維持に必要な依存関係が支援者の目の届かない範囲にまで広がっており、全体像が把握しにくくリスクの管理が困難になることが懸念される。

ii) ネオホームレスを取り巻く関係性の現状

多様な依存関係を構築しているネオホームレスの中でも、特に歌舞伎町内に限定された依存関係を持つタイプにとって、支援施設は外部社会とつながる貴重な機会であると考えられる。また、支援施設内での異タイプ間の交流や情報共有は、彼らの生活様式や活動範囲の拡大を促進する要因となっている。一方で、自傷行為に関して無回答が見られることから、支援者に対する心理的な壁の存在が示唆される。また、オーバードーズやリストカットの割合が高い点からも、多くの者が深刻な心理的不安定を抱えており、信頼関係の欠如が彼らの自己破壊的な行動のリスクを一層高めていると推察される。

iii) ネオホームレスが求める関係性

施設を利用するネオホームレスが、「イベントの開催」や「集まれる場所の増設」を希望していることから、他者とのつながりや、社会的な居場所を必要としていることが示唆される。暇つぶしやオーバードーズといった行動からは、孤立感や不安が伺え、彼らが社会と支え合える関係を構築できる支援体制の整備が必要であると考えられる。

4-4 小括

本章では、施設を利用するネオホームレスを取り巻く人々に焦点を当て、アンケート調査と参与観察を通じて歌舞伎町における人的関係性の実態を明らかにした。ネオホームレスは多様な関係性を持ち、ネオホームレスと社会を支援施設が繋いでいた。よって、支援者の立場や関わり方は、ネオホームレスにとって非常に重要な役割を果たしている。次章では、ネオホームレスと関わる支援者の意識を調査する。

第5章 ネオホームレスに対する支援側の意識

本章では、支援者に焦点を当て、ヒアリングを通じて支援者側の意識を明らかにする。これにより、周囲の人々が持つべき意識についての知見を得ることを目的とする。

5-1 調査概要

参与観察を通じて、ネオホームレスに影響を与えると特定された常勤スタッフ及び元支援施設利用者のスタッフ計4名に対し、半構造化インタビューを実施した。調査Vの概要を表7に示す。

表7 調査V概要

調査対象	常勤の支援者3名(＃1,＃2,＃3) 元施設利用者1名(＃4)
調査場所	駆け込み寺内
調査日程	2024/10/10, 2024/10/11
調査項目	1) 自身のバックグラウンド 2) 支援する上での意識 3) 駆け込み寺での立ち位置 4) 利用者に求めること

5-2 分析方法

発話を M-GTA に基づいて、図 20 に示す手順で分析した。

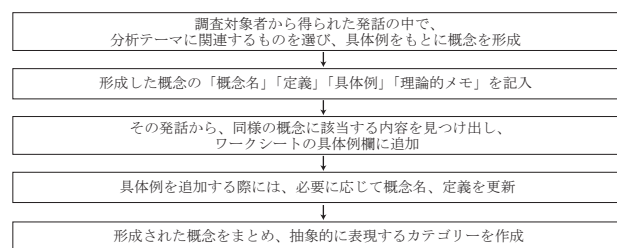


図 20 M-GTA 分析手順

5-3 支援者の意識

コーディングの結果を表8に示す。分析の結果、支援者の意識に関わる13の大カテゴリとそれに基づく4つの領域が明らかとなった。

表8 支援施設における支援者の意識

	カテゴリー	発話
① 曖昧な役割分担	支援者と相談者が似ている	ここに来ればみんな結構比較的、え〜わかるうちも家めんどいんだよね、みたいな。親戚いなんだよね、みたいになって(＃4)
	ポジションを設けない	このグリーゼンだからこそボクソ言えるし、うん、くそきもおじがよ、とか言えちゃうじゃん。(＃4) 相談者ですよねみたいなポジションを全然決めつけてないかな。ここはみんな一緒にいいじゃんみたいな。(＃3)
	トラブル因子の理解	何かしら歌舞伎にある人とかに依存しちゃってる場合は、よほどの強い意志がない限りは多分離れられない(＃4)
		ちゃんと助けるよ。ただ、電話とかメールとかじゃなくて、相談しに来いと言うスタンス。(＃3)
② ありのまま受け入れる	勇気を振り絞らせる	なんでもいいけど、何かしらその子にとってプラスになるものを提供できる。だから話聞いただけとかでもいいし。(＃4)
	心のよりどころとなる	来たらきたで、居場所でもいいやんか。守ってあげるから。(＃1)
	よく聞くみたいな	よく見る、よく観察。(＃4)
	理解してもらえという安心感の提供	とりあえず、信じてあげる。こっちで裏切られちゃったら、それはそれでオーライみたいな感じだね。(＃3)
③ 緩やかな規律	必要以上に詮索しない	本名もな、名前をなのらない。ニックネーム。で、それで、その日一日過ごす。過去は聞わない、明日も言わない、聞かないっていうのが歌舞伎町スタイルや(＃1)
		一定のルールがあるよっていうこともきちんと伝えていかないと、(中略)めちゃくちゃな場所になっちゃう(＃2)
	最低限のルール設定	信頼関係の上に、ある種の自主性を持たせれば、彼、彼女たちも自分たちでちゃんと規律を作るんです(＃2)
		なんか行動力はすごいあると思うの。(中略)だから、なんかそれをもうちょっと違うところにさ、活かしたらいいと思う。(＃4)
④ 社会を垣間見せる	新たな自分を発見させる	なんかその、成功体験みたいな。ここでできれば、なんか別に歌舞伎離れても別にやってけるよね、みたいな。(＃4)
	成功経験を積ませる	依存はしてほしくないから(中略)。たまに依存してきたなと思ったら、ちょっと離れたりする。(＃3)
	依存から脱却させる	立たなきゃ、問題は起こらないじゃん。だから、なんか、それを急になんか自覚し始めて、もうやめようみたいな。(＃4)
	反面教師としての存在	

- ①曖昧な役割分担：支援者とネオホームレスが同じ立ち位置でコミュニケーションを行うことにより、両者の関係が曖昧になっている。この曖昧さは、互いの信頼関係を強化し、支援の効果を高める要因となっている。
- ②ありのまま受け入れる：支援者はネオホームレスの生活状態を観察しつつ、「行ってらっしゃい」や「おかえり」等の言葉を用いて、オープンな環境を整えることで、いつでも戻れる居場所を提供している。このような受け入れの姿勢が、ネオホームレスの心理的安定感を促進している。
- ③緩やかな規律：支援者はニックネームを活用し、最低限のルールを設けることで、ネオホームレスと共に規律を定めながら、居場所を形成している。これにより、ネオホームレス自身が安心して主体的に居場所に参加しやすい環境が整備されている。
- ④社会を垣間見せる：支援者はネオホームレスの行動力を活かし、同様の経験を持つスタッフが手本となって成功体験を提供する新たなフィールドを用意している。また、保護者との交流を通じてネオホームレスと保護者のつながりを絶やさないことで、ネオホームレスが社会とのつながりを維持できるよう支援している。

5-4 考察

結果から以下のことが考察される。

- i) 領域①から、曖昧な役割分担は、ネオホームレスが居場所を受け入れる上での重要な要因であると考えられる。この曖昧さが、ネオホームレスが支援者を適度に頼れる状況を生み出している。また、支援者自身がネオホームレスの経験を共有することで、相互の信頼関係が強化されているといえる。さらに、領域②③から、支援者が最低限の規律を維持しつつ寛大に受け入れていることは、信頼関係を深化させ、共に空間を形成する意識を高める要因となっていることが示唆される。

- ii) 支援者の社会とのつながり

領域④より、支援者は、新たな活動の場を提供し、成功体験を共有することで、ネオホームレスの自立意識を高め、社会とのつながりを維持していると考えられる。また、支援者が適度な距離感を保つことで過度な依存を防ぎ、社会的ネットワークの拡張を促す効果もあると推察される。

5-5 小括

本章では、支援者の意識と役割について以下の2点が明らかになった。

- I 支援者とネオホームレスの曖昧な役割分担による関係性がお互いの信頼関係を築き、彼らの自立を促進させている。支援者がネオホームレスと共に規律を共に作り、協働することで、自立に向けた主体的な関与が促進されている。
- II 支援施設は単なる支援空間ではなく、社会への踏み台としても機能し、施設内コミュニティを超えて社会とのつながりや挑戦を提示する役割を果たしている。これにより、彼らが社会復帰への道筋を見つけやすいプロセスが構築されている。

第6章 総括

6-1 研究のまとめ

本研究では、歌舞伎町の支援施設を利用するネオホームレスの生活スタイルと関係性の実態を明らかにした。

第3章：ネオホームレスは支援施設を利用しながら多様な生活を送り、複数の属性が存在している。広場や公園に限らず、飲食店やネットカフェ、ホストクラブ、ホテルなど様々な場所を利用し、支援施設を介して異なる属性のネオホームレス同士がつながる機会が生まれている。

第4章：ネオホームレスは多様な人物との依存関係を築き、異なる属性の者や周囲の人々との交流を通じて生活圏を拡大している。一方で、社会において十分に信頼を託せる環境が整っておらず、信頼先を見出せていない現状も浮き彫りになった。

第5章：支援者とネオホームレスの曖昧な役割分担が信頼関係を築き、自立を促進している。そのなかで、支援者は対等な関係を通じて、依存を防ぎながら社会とのつながりを支える役割を果たしている。

6-2 ネオホームレスと歌舞伎町の関係性と居場所像

本研究の3章、4章、5章の結果から考えられるネオホームレスと歌舞伎町の関係性を図21(左側)に示す。

支援施設を利用する4タイプのネオホームレスは、歌舞伎町内外で4種類の依存を形成している。この過程で支援施設は情報共有の重要な媒介となり、生活基盤を維持に寄与している。支援者は受動的な応答を超え、彼らと共に問題解決に取り組む能動的な支援を行い、彼らの主体性を促進している。これにより、ネオホームレスが新たな挑戦の機会を得て、社会の中で信頼を築く過程が進んでいる。

ネオホームレスの求める居場所像は、食事や睡眠といった生活欲求から、他者との交流といった社会欲求までを包括的に担い、かつ1人である事と同じ境遇を抱えた仲間と連帯する事を自由に選択することができる空間を持つ。そしてその空間を基盤として、自分のことを多角的に支えてくれる多様な属性の周囲の人との信頼関係が構築できることで、社会活動に主体的に参加し活躍できる状態である。

一方で、社会的基盤は未整備である。ネオホームレスは周囲に信頼を寄せたいと考えているものの、新たな信頼先としての社会環境が不足している。自傷行為や中絶への対応体制はあっても、それを未然に防ぐ予防的な体制は不十分であり、都市環境の整備が急務である。

6-3 提案：施設における協働に基づく信頼構築システム

規制を超えた新たなアプローチとして、支援システムの在り方を図21(右側)に示す。ネオホームレスが、社会的なつながりを積極的に求めていること、駆け込み寺において自身のアイデアを提案し支援者と共に施設空間を作り上げていたことから、ネオホームレス支援システムのアプローチを「支援」から「協働」へと転換し、自身の経験や知識を活かし、同じ境遇にあるネオホームレスを導く立場を確立することを提案する。このシステムは、市販薬のリスクやメンタルケアといった、彼らが身につけた実践的な

知見を他者と共有する場を設け、ネオホームレスが「先輩」として後に続く人々に貢献する機会を生み出すことを目指す。さらに、支援者との間にも彼らのスキルや知識を共有する機会を提供する。SNS の最新トレンドやメンタルケアの方法など、ネオホームレス視点での実践的な知見を共有することで、支援者にとっても学びの場となると同時に、ネオホームレス自身が「教える側」としての自信と意欲を育むことができる。このような関係構築により、彼らにとって社会の中に信頼先が増え、従来の一方的な依存関係ではなく、対等な信頼関係が育まれる。こうして、ネオホームレスは支援の受け手としてだけでなく、自身の知見を社会に還元する存在となり、社会と共に歩む一員としての役割を担い、地域においても持続的な協働関係が促進される。

6-4 今後の展望

歌舞伎町は、ネオホームレスの交流と支援において極めて重要な役割を果たしている。支援施設は、このプロセスを後押しする重要な機関であり、適切に彼らの自立を促進する役割を担うべきである。さらに、支援施設駆け込み寺のような新たな挑戦の場への踏み台となる仕組みが全国のネオホームレスの交流の場にも導入されることが望ましい。この取り組みにより、多くのネオホームレスが社会の一員として位置づけられ、規制に縛られずに自らの可能性を発揮できる環境が整うと考えられる。一方で、本研究では支援施設を利用するネオホームレスに焦点を当てているが、支援施設を利用しないネオホームレスや居場所を見いだせない若者も存在している。このため、現段階ではネオホームレスに関する課題が包括的に解決されたわけではなく、未解決の問題に対しても注意を向ける必要がある。

【補注】

- (1) 情報は 2024 年 10 月時点のもの。
- (2) 平日と休日の各 1 日分の結果から 1 週間の平均を算出。

【参考文献】

- 1) 佐々木 チワワ, (2024), 「オーバードーズな人たち」, p. 167-p. 216, 講談社.
- 2) 佐々木 チワワ, (2022), 「「びえん」という病」, p. 37-p. 66, 扶桑社.
- 3) 青柳 貴哉, (2023), 「Z 世代のネオホームレス」, p210-p219 角川文庫.
- 4) 青柳 貴哉, (2023), 「Z 世代のネオホームレス」, p219-p220 角川文庫.
- 5) 東京都生活文化スポーツ局, 「第 33 期東京都青少年問題協議会 第 5 回専門部会」, 日本語, https://www.seikatubunka.metro.tokyo.lg.jp/tomin_anzen/about/kaigi/jakunen-shien/seisyokyo/33ki-menu/files/0000002142/siryou-senmonbukai5.pdf, 2024. 07. 15 閲覧.
- 6) 飯島 裕子, (2012), 「若年ホームレスの析出メカニズム：路上への経路分析を手がかりとして」, 日本労働社会学会年報, 第 23 巻, pp. 105-127.
- 7) 田中 研之輔, (2007), 「若者下位文化と社会的排除」, スポーツ社会学研究, 第 15 巻, pp. 71-85.
- 8) 佐久間 玲子, (2021), 「若者支援の現場からみるユースワーカーの役割について」, 社会デザイン学会学会誌, 第 12 巻, pp. A5-A6.
- 9) 小山田 建太, (2018), 「若者の実態に応じた支援施策の取組に関する一考察：一地域若者サポートステーション支援職員が捉える「居場所」に着目して」, 日本学習社会学会年報, 第 14 巻, pp. 95-104.
- 10) 一般社団法人 Colabo, 「少女たちと共に」, 日本語, <https://colabo-official.net/>, 2024. 08. 01 閲覧.
- 11) NPO 法人ぱっぷす, 「ぱっぷす」, 日本語, <https://www.paps.jp/>, 2024. 08. 01 閲覧.
- 12) 公益社団法人日本駆け込み寺, 「公益社団法人 日本駆け込み寺：誰もが SOS を言える社会へ」, 日本語, <https://nippon-kakekomidera.jp/>, 2024. 08. 01 閲覧.
- 13) 東京都, 「きみまも@歌舞伎町」, 日本語, <https://www.kimimamosoudan.metro.tokyo.lg.jp/>, 2024. 08. 01 閲覧.

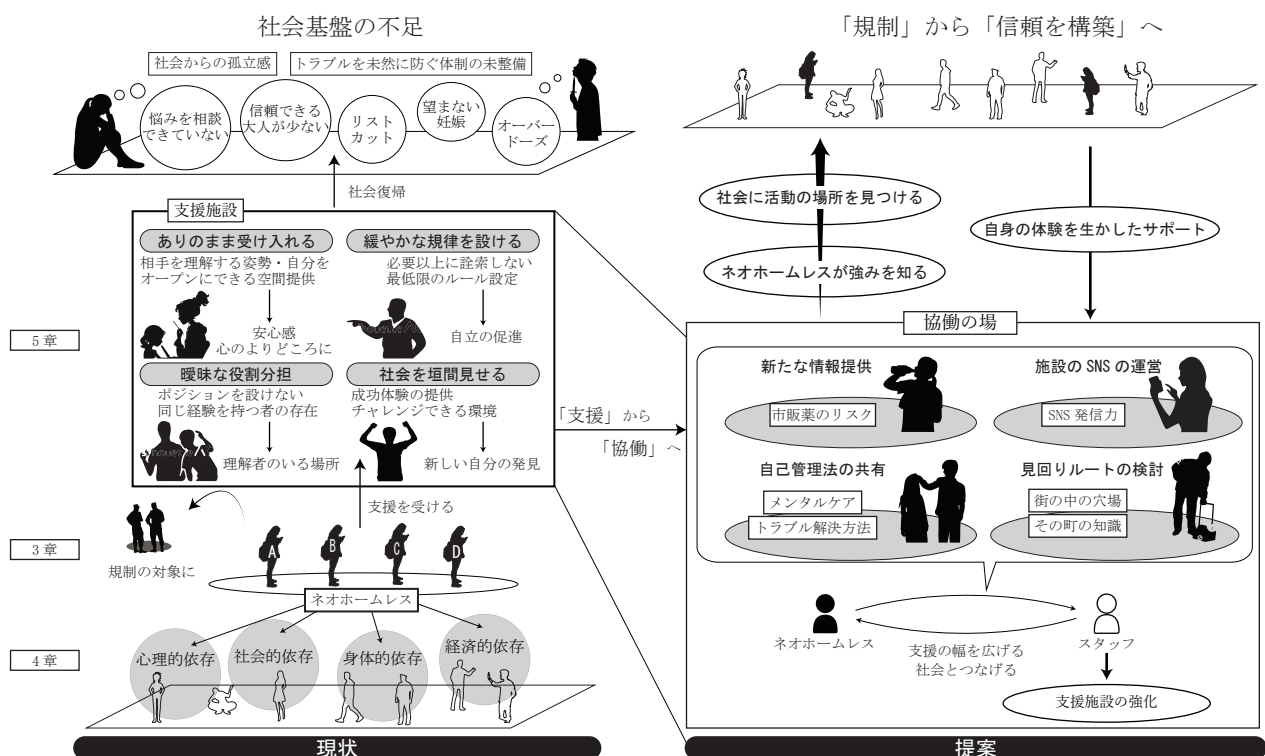


図 21 ネオホームレスと歌舞伎町の関係性の現状及び支援システムの在り方